2023（令和 5）年度　基礎的事項に関する点検・評価報告書

様式１

学部・研究科名　地域環境科学部
学部長・研究科委員長名　大林宏也
学科名・専攻名　森林総合科学科

１．教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 （☑を記入）	☑　している □　一部している □　していない	☑　講じている □　一部講じている □　講じていない	☑　行っている □　一部行っている □　行っていない	□　している ☑　一部している □　していない	☑　している □　一部している □　していない
点検項目に対する現状説明	現在の学科の教育・研究上の目的、教育目標、カリキュラムポリシーに基づき科目を配当している。	学科および各教員が協力して、最初に学習意欲を高め、徐々に専門的な教育へと展開している。 定期試験の結果や授業評価、講義・実習中の学生の反応などをもとに、工夫を行っている。学外実習や実習施設の充実を学科や研究室で行っている。	教員が成績評価の基準、採点後の試験やレポートの返却、試験の答案例の明示などを行っている。	３，４年生は全員が研究室に所属し、学生と教員がコミュニケーションを図りつつ、単なる知識、技能の習得のみならず、ディプロマポリシーの重視している「問題発見能力」、「問題解決能力」、「コミュニケーション能力」の各習得レベルを指導教員が把握し、評価している。	現在の学科の教育・研究上の目的、教育目標、カリキュラムポリシーに基づき科目を配当している。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 ・学生は２年時末に研究室を選択し、3 年時より各研究室へ所属し専攻演習を受講し、4 年時の卒業論文へとつなげている。	【長所】 フレッシュマンセミナー等を活用し、興味関心を惹起し、学習意識を高める等の工夫をしている。	【長所】 教育の評価については、各担当教員が責任をもって実施している。実習科目については、初回にガイダンスを配し、基準についての説明をしている。	【長所】 なし	【長所】 ・学生は 2 年時に研究室を選択し、3 年時に各研究室へ所属し専攻実験実習を受講し、4 年時の卒業論文へとつなげている。
	【特色】 ・専門的な知識や技能の習得。他校には少ない２年間に及ぶ卒論指導。	【特色】 対面型の指導にオンラインによる指導を交え、個々の学生の特徴・状況に対応した指導を実施。	【特色】 なし	【特色】 なし	【特色】 ・専門的な知識や技能の習得。
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 ・研究課題が細分化、専門化してきているため、学科全体の講義や実習との関連付けが必要である。	【問題点】 年々、大学運営に関する業務負担等も増加し、学内外での十分な調査研究困難な場合もある。	【問題点】 なし	【問題点】 教員各自の判断に任せがちであり、学科としての確認が不十分な点もみられる。	【問題点】 ・研究課題が細分化、専門化してきているため、学科全体の講義や実習との関連付けが必要である。
	【課題】 ・カリキュラムに基づいた効果の発揮や実習等への関連付けの確認。	【課題】 ・カリキュラムに基づいた効果発揮や実習等への関連付けの確認。	【課題】 留年・原級学生数をなくすべく、日頃から担任制を中心に、学生とコミュニケーションをはかりながら、学生の状況を把握することが必要である。	【課題】 留年・原級学生数をなくすべく、日頃から担任制を中心に、学生とコミュニケーションをはかりながら、学生の状況を把握することが必要である。	【課題】 ・カリキュラム改正後の新科目をはじめ、実習等への関連付けも確認する。
根拠資料名	現行森林総合科学科ポリシー 現行森林総合科学科カリキュラム CP・DP	オリエン手引き新入生、入学式時資料１、入学式時資料２ 森林総合科学科研究室紹介	シラバス確認書類＊	シラバスに明記している。 現行森林総合科学科ポリシー 現行森林総合科学科カリキュラム CP・DP	現行森林総合科学科ポリシー 現行森林総合科学科カリキュラム CP・DP

2023（令和 5）年度　基礎的事項に関する点検・評価報告書

様式１

２．学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 （☑を記入）	☑　している □　一部している □　していない	☑　行っている □　一部行っている □　行っていない
点検項目に対する現状説明	一般入試、共通テスト利用入試の受験生に対しては、大学案内、大学ホームページ、オープンキャンパス、学科パンフレットなどでアドミッションポリシーを公開している。また、指定校をはじめ、一般推薦入試の受験生を送り出す可能性のある高校には、出前授業や学校訪問を積極的に実施することでカバーしている。	学科の中高生応援実務委員会では、入学制の受験制度、出身高校などのデータを収集、分析し、指定校の見直し、学校訪問先の選択、学科パンフレットや学科 PR パネルなど広報資料の修正、作成を行っている。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 ・研究室横断的に、多分野の教員が合同で検討して問題作成を行っている。	【長所】 ・入試時に、受験動機、学科パンフレットやキャンパス見学会への参加などについて確認をしている。
	【特色】 ・入試時にアドミッションポリシーを配布して確認をしている。 採点基準、面接項目は、事前に確認して実施している。	【特色】 ・なし
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 ・分野名変更を行い、研究室の分野体制を変更したので、具体的な指導体制を検討する。今後は、さらに同様の検討を進める。	【問題点】 ・障がいをもつ学生への対応を行っている。
	【課題】 ・分野名変更、研究室体制の変更に伴う具体的な方針の検討と確認をする。	【課題】 ・卒業生へのアンケートを分析して確認する。
根拠資料名	出題委員の選出資料＊ 小論文採点表、入試面接諮問記録など	AO キャリア入試小論文採点表、AO 入試面接諮問など 指定校の見直し＊ 学校訪問等の確認＊

2023（令和 5）年度　基礎的事項に関する点検・評価報告書

様式１

３．教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 （☑を記入）	☑　している ☐　一部している ☐　していない	☑　している ☐　一部している ☐　していない	☑　行っている ☐　一部行っている ☐　行っていない	☑　つなげている ☐　一部つなげている ☐　つなげていない	☐　行っている ☑　一部行っている ☐　行っていない
点検項目に対する現状説明	学科の教育組織の編制方針のとおりであり、学科内で認識を共有している。さらなる効果的な教育のために、将来分野の編成の変更についても検討をおこなっている。	分野、研究室の編制見直し、教員の配置や年齢構成、将来的な人事計画（昇格、新規採用等）などを拡大主任会議、学科教授会等で検討している。	・任期制教員の面談と確認、 ・昇格に対する現状や希望の確認を随時行っている。 ・任期制期間の短縮変更にともなう対応をおこなっている。	・依命国外留学など中堅・若手教員の資質向上を図るための計画を作成している。そのための分野・研究室教員間の協力体制も検討している。 ・１名が留学中（2023 年 10 月に帰国）。 ・任期制教員に対しては、定期的に面談を行い、状況を確認している。	分野や研究室体制については、将来構想委員会などで検討している。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 ・学科の分野名を段階的な分野設定から視点や手法に基づく分野へと変更しつある。	【長所】 ・学科教授会において、人事計画について検討している。	【長所】 ・学科教授会において、人事計画について検討している。	【長所】 ・若手教員が依命留学に行けるような体制を整えている。	【長所】 ・なし
	【特色】	【特色】 ・森林を取り巻く総合的なアプローチが可能である。	【特色】 ・なし	【特色】 ・該当する研究室の受け入れ学生人数を調整したりしている。	【特色】 ・なし
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 退職教員に対応した枠取り申請などが計画段階にあり、対応する必要がある。	【問題点】 ・人事体制のさらなる明確化。	【問題点】 ・年々、教員の負担が多くなってきているので、全体で分担するように心がけている。	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・分野名の変更に伴う状況について、確認をする。
	【課題】 ・分野名変更、研究室構成変更に伴う新体制の構築	【課題】 ・具体的な人事体制を明確にする。	【課題】 ・教育業績だけでなく、大学や学科への貢献度や学生対応なども考慮する。	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし
根拠資料名	将来構想委員会資料 学科リーフレット A4 版、学科リーフレット改定版、教育懇談会資料	学科教授会開催＊	学科教授会開催＊	任期制面談記録＊ 海外依命留学資料＊	学科リーフレット A4 版、学科リーフレット改定版

2023（令和 5）年度　基礎的事項に関する点検・評価報告書

様式１

学部・研究科名　地域環境科学部
学部長・研究科委員長名　大林　宏也
学科名・専攻名　生産環境工学科

１．教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 （☑を記入）	☑　している □　一部している □　していない	☑　講じている □　一部講じている □　講じていない	☑　行っている □　一部行っている □　行っていない	□　している ☑　一部している □　していない	☑　行っている □　一部行っている □　行っていない
点検項目に対する現状説明	カリキュラム・ポリシーに基づき、学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成している。1･2 年次には分野共通的な科目を、学年の進行に伴い、分野・研究室を意識指させるような専門教育科目を配置している。	個人面談を定期的に実施している。また、教育点検委員会や各科目関連の検討委員会を設置し、効果的な教育を行うための措置を講じている。その他、数科目について教員相互の授業視察を実施している。答案・レポート返却を実施し、復習させるように努めている。	成績評価の方法や基準はシラバスに明記している。試験については正答の開示を行い、採点後の答案や添削したレポートの返却を実施している。卒業論文については教員相互の評価を実施している。最終的な単位認定・学位授与については、教員会で判定している。	定期的に行う個人面談で学習成果の把握を実施している。面談では学生本人からの履修状況の申し出とともに、学生カルテ掲載の成績を利用している。 技術者養成コースの学生には学習目標達成度評価を行ってもらっている。	教育改善委員会は毎週、教育点検委員会および技術者教育検討委員会は月 1 回程度開催し、定期的に教育課程及びその内容、方法の適切性を点検・評価し、恒常的に改善･向上に向けた取り組みを行っている。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 ・分野＞研究室＞教員へと所属を細分化することで、専門教育への導入を緩やかに、かつ効果的に行うことができる。	【長所】 ・いくつかの措置により学生の学習意欲を高く保つことができる。	【長所】 ・学生が納得できる評価を行えている。 ・卒業論文に関しては第三者から，または専門分野外から評価・コメントも受けられる。	【長所】 ・個人面談は学生の履修状況を把握することに利用できる。 ・達成度評価は学生と教員による把握を容易としている。	【長所】 ・問題が生じた場合の改善策を迅速に議論し､改善への取り組みの着手が容易である。
	【特色】 ・工学的な専門科目を理解できるように理数系の基礎科目を配置している。	【特色】 ・定期的な個人面談、授業視察、答案・レポート返却など実施している。	【特色】 ・採点後の答案や添削したレポートの返却を実施している	【特色】 ・個人面談を実施して対応している。	【特色】 ・学科のカリキュラム･ポリシーや教育コースに沿った委員会を設置している。
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 ・低学年次に、学生が興味を持ちやすい実習的、現場体験的授業が少ない。	【問題点】 ・個人面談実施に応答しない学生や質問しない学生、答案レポート返却を受けない学生がいる。	【問題点】 ・答案の返却によって過去の試験問題が流出するため、授業全般に対して幅広く学習する姿勢が低下する可能性がある。	【問題点】 ・現在、達成度評価は技術者養成コースの学生のみ作成している。 ・履修モデルに従わない学生がいる。	【問題点】 ・点検項目には問題ないが、委員会が過多となり､教員の労働負担が過大となっている。
	【課題】 ･2024 年度カリキュラムでは､現場体験的な内容の授業科目を導入し、より実効性の高いものへと改善する予定である。	【課題】 ・学習意欲のまったくない学生への対応を検討していかなければならない。	【課題】 ・試験の出題法や評価の仕方を工夫する必要がある。	【課題】 ・全学生が達成度評価を行うように指導していく。 ・履修モデルに沿った履修を行うように指導を強化する必要がある。	【課題】 ・ルーチンワークとして実施できる部分は簡素化し、改善･向上への取り組みを実効性のあるものとする。
根拠資料名	カリキュラム・ポリシー（a1-①-1） 学科開設科目（a1-①-2） カリキュラムツリー（a1-①-3）	個人面談記録（a1-②-1）	ポートフォリオの作成（a1-③-1）	ディプロマ・ポリシー（a1-④-1） 学習目標達成度自己評価（a1-④-2）	教育関連委員会関連図（a1-⑤-1） 教育改善委員会議事録（a1-⑤-2）

2023（令和 5）年度　基礎的事項に関する点検・評価報告書

様式１

２．学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 （☑を記入）	☑　している □　一部している □　していない	☑　行っている □　一部行っている □　行っていない
点検項目に対する現状説明	本学の学生募集・入学者選抜には、一般選抜、大学入学共通テスト利用選抜（2 科目型、3 科目型、4 科目型）の他、自己推薦型選抜、公募型選抜、特別選抜などがあり、自己推薦型選抜には、キャリアデザイン総合型選抜、高校で学んだ実践スキル総合型選抜、東京農大ファミリー総合型選抜が、公募型選抜には一般学校推薦型選抜が、特別選抜には指定校推薦型選抜、併設高校推薦型選抜などがある。一般選抜は A 日程、B 日程が、大学入学共通テスト利用選抜においても前期募集と後期募集(後期は 3 科目型のみ)が整備されている。特に、指定校推薦型選抜の指定校は学科が選定することになっており、全国にわたって多様な高校を指定している。これら選抜制度により多様な高校生の確保を可能としている。また、合否判定には、一般選抜及び大学入学共通テストでは筆記試験の点数により、その他の選抜制度においては、学科独自で出題する小論文や学科教員で対応する面接あるいは口頭試問により適性を判断し、各試験終了後に開催する合否判定会議において結果を総合して評価し合否を判定している。このようにして公正な入学者選抜を実現している。	学生の受け入れの適切性については、各入試制度の終了後の学科での合否判定の際に点検を行っている。必要に応じて改善・向上に向けた取り組みを行っている。また毎年、大学主導のもと入試制度について点検と見直しを実施している。アドミッションポリシーについては、大学案内やホームページの更新の際に見直しを行っている。また、在学生の成績と併せて、個人面談を実施するなどして在学生の状況を把握し、入学制度別に整理することで、入学時の受け入れの適切性の評価につなげている。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 ・多様な入試制度は、多くの受験機会を高校生に与えることになっている。	【長所】 ・なし
	【特色】 ・多様な入試制度を併用することは、入学後において資質や経験において多様な学生が共存することになり、在学期間中のみならず卒業後にも重要な、成長の場を提供することになる。 ・指定校推薦型選抜等で地方出身の学生を数多く入学させ、卒業後に地方で就職させる、ということは、まさに「人物を畑に還す」という本学のポリシーに則している。	【特色】 ・個人面談などにより入試制度と学習状況を把握することができる。
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 ・多様な入試制度を併用することは、多様な学生が入学するということになるが、学力の差が大きい学生が入学してくる場合もあり、入学後の教育の負担が大きくなる。	【問題点】 ・入試は大学主導のもと実施されている。学科としては入試科目の中の選択科目の設定は任されているが、必須科目と選択科目を自由に指定できない。
	【課題】 ・入学後の教育についていける能力のある学生の質を入学者選抜で判定しなければならないが、一方で、志願者数の確保も重要であり、入学前準備教育も含め引き続き検討する必要がある。	【課題】 ・学科の独自性を活かし、より多様な学生を確保するために学科あるいは学部独自で入試を実施するということも考えられる。
根拠資料名	募集人員（a2-①-1） 評価結果(一般学校推薦)（a2-①-2）	満足度調査結果（a2-②-1）

2023（令和 5）年度　基礎的事項に関する点検・評価報告書

様式 1

3．教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 （☑を記入）	☑　している □　一部している □　していない	☑　している □　一部している □　していない	☑　行っている □　一部行っている □　行っていない	☑　つなげている □　一部つなげている □　つなげていない	☑　行っている □　一部行っている □　行っていない
点検項目に対する現状説明	農業土木学系 2 分野と農業機械学系 1 分野、それに広域情報系 1 分野の計 4 分野で、さらに各分野は 2 つの研究室で構成されている。	研究室に留まらず分野でも協力しながら各分野・各研究室の教育・研究活動を網羅的に実行している。複数名の教員を 1 研究室に配置することを原則としているが、現在、常勤教員が 1 名となっている研究室がある。嘱託助教を採用し支障がないようにしている他、2024 年度以降は新体制へと変更する。	教員の欠員が生じる場合には、直ちに適切な教員構成となるよう人事計画を策定し実行している。募集は公募で行い採用については大学規定のルールのもと行っている。昇格については毎年、研究業績・教育・管理業務等の実績調査を該当者に実施し、学科の基準を満たした者については学科教授会の推薦により昇格できるようにしている。	大学の制度である依命留学は、毎年候補者を検討している。教育に関して、教育改善委員会、教育点検委員会、技術者教育検討委員会、非常勤講師懇談会、教育システム評価委員会等を組織しており、また私情協から情報提供を受ける FD 実施への参加、研究に関して、大学が実施する科研費応募のための申請書作成の講習会への参加を促したり、全分野にわたる学生の卒論発表会に参加してもらい幅広い研究に触れる機会の増加を図ったりするなどして資質の向上・改善につなげている。	教員組織の適切性は毎週 1 回開催される教員会・教育改善委員会で、また定期的に開催されるその他の各委員会において点検・評価されている。2023 年度の教員組織には問題がなかったことから、改善・向上に向けた各教員の資質向上へ向けた取り組みを継続して実施していくこととした。さらに、2024 年度からの新体制においては 2025 年度新規採用者確保も含めてより適切な教員組織とする必要がある。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 ・なし	【長所】 ・幅広い教育研究活動を実現できている。	【長所】 ・透明性の高い人事を実現できている。	【長所】 ・幅広い議論の場、情報交換の場を設けている。	【長所】 ・毎週 1 回全員参加の会議を開催していることで、迅速な対応が可能である
	【特色】 ・なし	【特色】 ・各研究室の教員数に応じて所属学生を配分することで、各教員の教育上の負担が均等になるようにしている。	【特色】 ・本学では職階毎の人事枠の規定はないので、点数化された基準を満たせば昇格できるようになっている。	【特色】 ・技術者教育機関として外部(JABEE)から認定されるほど多様な教員の質の向上策及び教員組織の改善策を実行している。	【特色】 ・学外（卒業生や技術士）からの評価を取り入れる仕組みを有している。
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 ・2024 年度からの分野・研究室再編に伴い、教員組織も適切に編制する必要がある。	【問題点】 ・学生の希望や要望を十分に取り入れた教育上の体制となっていない場合がある。	【問題点】 ・昇格者の増加により、従来、助教等が行っていた業務を准教授・教授となっても担当してもらわなければならない。	【問題点】 ・多数の委員会が存在しており、会議のために多くの時間をさかなければならない。	【問題点】 ・学外者からの組織の評価と高校生の興味は一致しないので、入学志願者の増加につながらない場合もある。
	【課題】 ・限られた教員数で実効性の高い方針を検討し、明示していかなければならない。	【課題】 ・ディプロマ・ポリシーと学生の要望の整合を図りつつ、教員組織の編成について検討していかなければならない。	【課題】 ・職階で業務を限定しないようにする。	【課題】 ・会議は少なくして実効性の高いものにしていく必要がある。	【課題】 ・社会のニーズと多くの高校生の興味との整合を図るべく広報活動が必要である。
根拠資料名	教員組織の方針と編成（a3-①-1）	教員組織の方針と編成（a3-①-1） 2024 学科新体制（a3-②-1）	昇格に関する業績等調査依頼・回答書（a3-③-1） ロボ研公募文（a3-③-2） ジオ研公募文（a3-③-3）	各種委員会名簿（a3-④-1）	教育改善委員会議事録（a1-⑤-2）

2023（令和 5）年度　基礎的事項に関する点検・評価報告書

様式１

学部・研究科名　　地域環境科学部
学部長名　大林　宏也
学科名　造園科学科

１．教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☑　している □　一部している □　していない	☑　講じている □　一部講じている □　講じていない	☑　行っている □　一部行っている □　行っていない	☑　している □　一部している □　していない	☑　行っている □　一部行っている □　行っていない
点検項目に 対する 現状説明	基礎的な科目から、造園学を形成する３つの分野(環境計画・設計分野、ランドスケープ資源・植物分野、景観建設・技術分野)に関する科目、および専門科目を総合化する科目を配当する教育体系を編成している。具体的には以下(1)～(5)の配当となる。(1)地域環境を構成する植物、土、水の基本要素に関する基礎教育、地域環境問題に関する見方や地域環境科学の学習の動機付け、造園を学ために必要な感性の醸成をねらいとした基礎科目の配当(2)造園学における計画・設計に関わる基礎理論と専門理論、造園空間創成のための手法論を修得する環境計画・設計分野に関する専門科目の配当(3)生物や生態に関わる基礎知識、造園植物や造園植栽、緑地生態などに係る基礎理論と専門理論、造園空間創成のための技術論を修得するランドスケープ資源・植物分野に関する専門科目の配当(4)造園建設・施工に関わる基礎知識と専門理論、造園空間創成のための技術論を修得する景観建設・技術分野の専門科目の配当(5)造園学を構成する３分野を統合し、造園学を応援的に理解しつつ、グループディスカッション、グループワークを軸に学修を展開することで、実践的・実務的な応用力を修得する総合化科目及び学際領域科目の配当	造園科学科では、演習科目を軸として授業を行い、体験的かつ実践的な学習を可能としている。 主な演習科目は以下の通りである。	学科全教員がシラバスにおいて成績評価基準を示し、採点した試験解答や評価した演習課題の返却を実施している。教員相互、あるいは第三者(日本技術者教育認定機構JABEE)等に成績評価、単位認定及び学位授与が適切に運用されているかが確認できるようにしている。	造園科学科では造園技術者育成のために８項目の能力を提示している。各学年前期・後期初めの学年ガイダンスにおいて能力育成のための学習・教育目標の達成度(学習成果)について自己評価及び学年担任によるチェックを実施している。また、成績不振者等に対してはサポート面談を実施している。	造園科学科の授業科目は、第三者機関である日本技術者教育認定機構(JABEE)による認定を基本とする。 現在は 2021 年に実施された JABEE 審査時の指摘をもとに、コース制への変更と新評価システムの構築を実施している。また毎年非常勤講師・客員教授との意見交換会を実施しており、授業担当者間における相互理解を図っている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・３分野の専門科目を基幹とした構成 ・３分野の専門科目の分野横断的・総合化を狙った講義および実習・演習の体系的配当・将来の進路選択や実社会のニーズに即した専門科目を秩序立てて選択することが可能なカリキュラム構成・地域環境科学部学部共通科目などと連動した複合的・総合的なカリキュラム構成による先鋭化	【長所】 ・体験型の演習と理論的な学習を並行して実施することにより、学生の理解や興味がより深まっている。	【長所】 JABEE プログラムの精度担保のために、JABEE 担当者による授業シラバスの定期的な点検、成績評価の客観性、単位認定及び学位授与の適正性の点検を行っている。	【長所】 学生自身が学習教育目標到達度チェックを行い、状況の見える化を図ることで、自ら改善点を考えるきっかけとなっている。	【長所】 第三者機関による客観的な評価及び改善点の指摘を元に、改善点について科内会議にて日常的に検討を実施している。
	【特色】 ・第三者機関の審査(日本技術者教育認定機構(JABEE))に耐えうる教育体制としている。	【特色】 ・演習に携わる非常勤講師に社会的ニーズについて伺い、授業にフィードバックしている。	【特色】 ・第三者機関の審査(日本技術者教育認定機構(JABEE))に耐えうる教育体制としている。	【特色】 ・第三者機関の審査(日本技術者教育認定機構(JABEE))に耐えうる教育体制としている。	【特色】 ・第三者機関の審査(日本技術者教育認定機構(JABEE))に耐えうる教育体制としている。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次年度への課題	【問題点】 ・自然科学と社会科学、芸術の関係性を整理しつつ、結びつける総合化の難しさが存在する。	【問題点】 ・自然環境などに対する学生の原体験の減少により、体験させるべき内容や量の検討が必要である。	【問題点】 JABEE プログラムのコース制移行に伴い、授業シラバスや講義・演習の点検基準の見直しが必要となっている。	【問題点】 JABEE プログラムのコース制移行に伴い、コース選択者以外の学生の学習意欲が継続的に保てるよう更なる工夫が必要である。	【問題点】 JABEE プログラムのコース制移行に伴い、学科内の評価・改善担当者の効果的な分担の仕組みを考える必要がある。
	【課題】 ・社会的ニーズへの対応や追随に課題が残る。	【課題】 演習に掛ける教員の労力や時間が過負担にならないように調整する必要がある。	【課題】 ・新たな点検基準の学生及び非常勤講師などへの周知。	【課題】 学習教育目標到達度チェック後の全体指導及び面談設定の仕組みの構築	【課題】 教育点検担当者選出における効果的・効率的な方法を作る
根拠資料名	https://www.nodai.ac.jp/application/files/6214/8912/0076/land_curriculum_h29.pdf https://www.nodai.ac.jp/application/files/4716/2373/5810/2-2_.pdf	造園学科指針 2023 p51-70	造園学科指針 2023 p51-70	造園学科指針 2023 p51-70	造園科学科プログラム点検書(実地審査後)(2021 年 10 月 11 日)

２．学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 （☑を記入）	☑　している ☐　一部している ☐　していない	☑　行っている ☐　一部行っている ☐　行っていない
点検項目に対する現状説明	造園科学科では、当学科の教育・研究・就職などの特徴を踏まえ、首都圏のみならず地方の高校や農業系高校からの受験生獲得のために継続的な議論を行っている。推薦入試による入学者選抜においては、事前課題として自然環境や都市環境に関する小論文及び作画課題などを課すことでアドミッション・ポリシーに基づく受験生確保を目指している。また面接における学科教員の組分けは、可能な限り専門分野や職階の異なる組み合わせを行い、多様な観点からの選抜を担保している。	前期・後期の開始時及び終了時に行う JABEE コース選択者に対する個人面談や希望者及び成績不審者への面談を通し、学生受け入れ時の属性を加味しながら、受け入れの適正性について点検を行っている。毎週実施する学科教員会において各学年担任から面接結果の報告や教員間で共有すべき学生状況について報告が行われている。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 ・学科の特色(自然科学・社会科学・芸術)を生かした推薦入試の事前課題により、自然保護活動やまちづくり活動に興味をもつ受験生の確保が行えている。	【長所】 ・本学科卒業生の就職先を検証したところ、造園界に多様な分野(公務員、教員、ゼネコン、造園・建設系企業、設計事務所、コンサルタント、樹木生産者等)に就職を果たしており、造園技術者の中核として活躍している。これらのことから学生募集の方針や体制に問題はないと考える。
	【特色】 ・各種推薦入試、優先入試、共通テスト利用型入試、一般入試と多様な入試制度によって入学者選抜を行うことで、多様な人材の確保を可能としている。	【特色】 ・多様な入試制度及び試験内容により学生を選抜することで、適正が伴う学生達の学習状態は極めて良好であり、企業から専門性や意欲の高さを評価されている。
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 ・年内入試の受験者数や合格者数が増加することで、一般入試の受験者数が減少している。	【問題点】 ・特に推薦入試や優先入試による入学者の学力の低下が生じている。資質と高い意欲を 4 年間持続する学生達が存在する反面、意欲の低下による学業不振が生じている学生達も散見される。
	【課題】 ・造園科学科の魅力を良い多くの受験生や社会全体に伝え、受験者の総数を増加させることが急務である。	【課題】 ・学生達の学習レベルや意欲の差を縮める教育プログラムの検討する必要がある。
根拠資料名	2024 年度大学案内	2023 年度造園科学科指針 2024 年度大学案内

3．教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 （☑を記入）	☑　している ☐　一部している ☐　していない	☑　している ☐　一部している ☐　していない	☑　行っている ☐　一部行っている ☐　行っていない	☑　つなげている ☐　一部つなげている ☐　つなげていない	☑　行っている ☐　一部行っている ☐　行っていない
点検項目に対する現状説明	学部運営委員会において示された教員組織の編制などに関する情報は、教員ポータルで全学科教員に共有を図っている。 また学科教員会においても学部の方針について提示し、議論するよう心掛けている。	造園科学科は 2021 年度より 5 研究室体制(1 研究室 3 名)に移行している。2024 年度は嘱託教授(0.5 枠)２名を含めた教員組織編制となるが、2026 年度には専任教員による 15 名体制への移行を計画している。	造園技法・材料学研究室の教員募集を実施した。複数名の応募があったが適任者がおらず、2024 年度枠取り延長を行なった。 昇任の可能性がある教員の業績について複数名の教授による確認・サポートを実施した。	教員昇格に関する学科長面談を対象者に対して複数回実施した。さらに面談結果を学科で共有し、昇格に対するサポートを検討した。	学科教授の会を定期的に実施し、現状について点検を行っている。 教授以外の教員へのヒアリングの場を定期的に設定し、意見の徴収を行った。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 ・教員ポータルの活用により、同時に全職階の教員へ直接方針の明示ができる。	【長所】 ・学科の教育方針(3 分野 5 研究室)と教員組織が連動しており、学生にとって理解しやすい教育環境となっている。	【長所】 ・教員募集に際し、学科全体で学外への周知等を実施した。	【長所】 ・学科教授会及び教授以外の教員とのミーティング、全体協議など闊達な意見交換が可能な環境を設定している。	【長所】 ・職階ごとのミーティング設定により活発な意見出しが可能になった。
	【特色】 ・方針共有後、学科教員会にて議論することで学科の特徴を活かした具体的方策へと展開できる。	【特色】 ・教育と研究活動の推進に適した環境となっている。	【特色】 ・教員募集や昇任を通して、学科の将来ビジョンを学科全体で共有することで、課題点等について共通意識を持つことができる。	【特色】 ・多様な意見の汲み上げにより、長・中・短期的な教員組織の目標を全体で共有しつつ実現化を図る基盤作りを進めている。	【特色】 ・職階や年齢ごとに意見を整理することで、多様な観点からの課題や解決方策が浮かび上がった。
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 ・学科が学部を構成する一組織であることの認識がやや薄く、教員組織の編制に関する方針の理解を促し続ける必要がある。	【問題点】 ・現在、教員年齢と専門分野のバランスに偏りが生じており、複数年かけての是正に取り組んでいる。	【問題点】 ・学問や分野の特殊性から適任者が限られてしまう現実があり、採用に至らない状態が続いている。	【問題点】 ・組織を構成する個々人の課題点を洗い出した後、それらを個人の問題としてだけではなく、組織としてサポートする新たな方策について検討・実行する必要がある。	【問題点】 ・点検・評価後の改善・向上方策に対しては、学科全体での課題解決方策へのビジョン共有が必要となる。長・中期ビジョンに対する全体理解はまだ十分ではない。
	【課題】 ・学科の特徴を充分に活かすことで学部の魅力も増す好循環に対する具体策を議論していく。	【課題】 ・適正バランスへの是正計画は検討しているが、造園という専門分野の特殊性もあり人材の確保が容易ではないため、早めの人材探しや人材育成が重要である。	【課題】 ・採用公募の情報をより広く効果的に拡散、展開する工夫が必要である。	【課題】 ・教員ひとりひとりの長所を活かし、かつ課題点を発見するために、組織マネジメントの重要性を全体で再認識する必要がある。	【課題】 ・1on1、職階や年齢等の属性毎の検討、全体での共有の流れは浸透しつつあるが、組織マネジメント体制が充分とはいえないため、その構築が今後の課題と言える。
根拠資料名	2023 年度学科教員会資料	2023 年度学科教員会資料	2023 年度学科教員会資料	2023 年度学科教員会資料	2023 年度学科教員会資料

2023（令和 5）年度　基礎的事項に関する点検・評価報告書

様式１

学部・研究科名　地域環境科学部
学部長・研究科委員長名　大林 宏也
学科名・専攻名　地域創成科学科

１．教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 （☑を記入）	☑ している ☐ 一部している ☐ していない	☐ 講じている ☑ 一部講じている ☐ 講じていない	☑ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☐ している ☑ 一部している ☐ していない	☑ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する現状説明	学科設置時に文科省に提出した「設置の趣旨等を記載した書類」および事前相談資料「③教育課程等の概要」、「⑤授業科目の概要」に記載したカリキュラムポリシーおよび授業等科目群にしたがって、教育課程を体系的に編成している。	実習科目と専門科目との関連性を説明し、必要に応じて講義資料等の復習を指導している。また、実習科目では実習内容毎に資料を配付し、自主学習を促している。	シラバスに成績評価基準を明記し、それに従った評価および単位認定を行っている。実習科目など学科横断的な科目の評価では、学科教員で情報を共有し、適切な指導がおこなわれているかを確認している。	ディプロマポリシーを考慮した履修モデルに基づいた科目履修を指導している。また、授業アンケート調査を中心に全学年での学習成果の確認をおこなっている。	教員全員が参加する学科内会議において教務関連事項について審議している。 特に実習科目においては学科内に実習検討委員会を組織し、実習内容の検討を行っている。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 1 年次から「地域づくり」を意識した教育カリキュラムを展開している。	【長所】 シラバスに沿って実施しており、 提示する長所はない。	【長所】 シラバスに沿って実施しており、 提示する長所はない。	【長所】 実習等の機会は、ポートフォリオ作成の機会につながる。	【長所】 実習科目の関連を意識した検討を行っている。授業アンケート調査結果に基づき、毎年点検評価をおこなっている。
	【特色】 1 年次から 3 年次まですべての学年で実習科目を配置し、実践的教育を行っている。	【特色】 シラバスに沿って実施しており、 提示する特色はない。	【特色】 シラバスに沿って実施しており、 提示する特色はない。	【特色】 ディプロマポリシーを意識し、地域づくりに資する人材育成を行っている。	【特色】 1 年次から 3 年次まですべての学年で実習科目を配置し、実践的教育を行っている。
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 新型コロナ拡大時は遠方での活動を制限したが、現在はコロナ前に戻し実習内容の全般的な見直しを行っている。	【問題点】 特になし	【問題点】 特になし	【問題点】 特になし	【問題点】 特になし
	【課題】 特になし	【課題】 特になし	【課題】 特になし	【課題】 卒業生に対するヒアリング等から、本学科で提示している学習成果について把握する。	【課題】 特になし
根拠資料名	学生生活ハンドブック［カリキュラム］教育研究上の目的・教育目標・3 つのポリシー	シラバス	シラバス、 令和 5 年度 地域創成科学科 教員会議議事録	履修のてびき 教育研究上の目的・教育目標・3 つのポリシー	地域創成科学科 学科内役割・委員一覧

2023（令和 5）年度　基礎的事項に関する点検・評価報告書

様式 1

２．学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 （☑を記入）	☑　している ☐　一部している ☐　していない	☑　行っている ☐　一部行っている ☐　行っていない
点検項目に対する現状説明	理系、文系を問わず、「地域づくり」に積極的に取り組める学生を募集し、様々な選抜試験を行っており、その結果を公表している。	学科会議、入試選考会議は全教員が参加することとしており、学生の受け入れの適切性は担保されている。 また、次年度（令和 6 年度）入試の定員数、受験科目についても、入学センターと連携し協議している。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 一般入試、大学入学共通テストでは、学内の他学科に比べて、幅広い科目選択による受験を可能としている。また、 推薦入試では「地域づくり」を意識した小論文を課し、選抜を行っている。	【長所】 推薦入試では「地域づくり」を意識した小論文を課し、選抜を行っている。
	【特色】 大学案内では、「地域づくり」をキーワードとした学科紹介を行い、読み手にアドミッションポリシーが伝わるよう意識している。 大学 HP 上での動画公開、インスタグラムにより、学科の広報活動を積極的に実施している。	【特色】 理系、文系を問わず、「地域づくり」に積極的に取り組める学生を募集している。
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 ・特になし	【問題点】 ・特になし
	【課題】 ・特になし	【課題】 ・特になし
根拠資料名	大学案内 2023［2024 年度入試制度］ 教育研究上の目的・教育目標・3 ポリシー	令和 5 年度 地域創成科学科 学科会議議事録

2023（令和 5）年度　基礎的事項に関する点検・評価報告書

様式１

３．教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 （☑を記入）	☑　している ☐　一部している ☐　していない	☑　している ☐　一部している ☐　していない	☑　行っている ☐　一部行っている ☐　行っていない	☐　つなげている ☑　一部つなげている ☐　つなげていない	☐　行っている ☑　一部行っている ☐　行っていない
点検項目に対する現状説明	大学及び本学部の教員組織の編制方針を踏まえるとともに、本学科の教育研究上の目的、教育目標及び３つの方針を十分理解し、それらに対応する能力と意欲を備えている教員を配置する、としている。	地域創成科学を構成する各々の学問領域において、研究・教育能能力を備え、地域創成科学の発展に貢献できる教員を配置している。	退職教員の後任人事を公募し、助教（任期付）の正式採用に至った。 准教授ならびに助教の教員に対して毎年業績調査を行い、昇格について学科教授会で審議している。	新たな研究シーズの発見、これまでの研究領域の応用展開が期待できる若手教員に対して、積極的に海外留学を認めている。令和 5 年度から 6 年度にかけて、准教授 1 名が依命国外留学中である。	退職予定者の後任人事案件が生じた場合、後任補充にとどまらず、学科の将来を見据えた教育研究分野の人材について審議し、枠取り申請ならびに教員公募の要件を設定している。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 教員組織の編制方針に記した通りであり、長所や特色は特にない。	【長所】 特になし	【長所】 年齢に関係なく、十分な業績を有し、学科運営に積極的な人材を昇格対象としている。	【長所】 1 研究室あたり 3 名の教員を配置し、留学教員不在時の支援体制を整えている。	【長所】 専門分野の固定化に陥ることなく、時代の要請に応じた適材適所の人材を確保する。
	【特色】 教員組織の編制方針に記した通りであり、長所や特色は特にない。	【特色】 「地域づくり」に対応し、学科として幅広い研究領域を有している。	【特色】 ・特になし	【特色】 実習は全教員が参加することで、留学教員不在時の支援体制を整えている。	【特色】 ・特になし
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 ・特になし	【問題点】 ・特になし	【問題点】 ・特になし	【問題点】 ・特になし	【問題点】 ・特になし
	【課題】 ・特になし	【課題】 ・特になし	【課題】 ・特になし	【課題】 ・特になし	【課題】 ・特になし
根拠資料名	教員組織の編制方針 設置認可申請書・届出書「設置の趣旨等を記載した書類」 オ．教員組織の編成の考え方及び特色	教員組織の編制方針 設置認可申請書・届出書「設置の趣旨等を記載した書類」 オ．教員組織の編成の考え方及び特色	令和 5 年度 地域創成科学科 学科教授会議事メモ	下嶋准教授　留学申請書・ 同意書	令和 5 年度 地域創成科学科　学科会議議事録

2023（令和 5）年度　包括的な点検・評価報告書

様式２

学部・研究科名　地域環境科学部
学部長・研究科委員長名　大林　宏也
学科名・専攻名　森林総合科学科

１．教育に関する総合的事項

	①	②	③
目　標	◎ カリキュラム改正 平成 30 年に実施した分野名変更、令和元年に実施したカリキュラム改正を踏まえて、カリキュラムの実施状況などの確認を行い、次期カリキュラム体制を整える。また、カリキュラムと関連した実習内容や担当についても確認、検討する。	◎ 卒業生の質保証 問題発見およびその問題解決能力、分かりやすく表現できる記述力やプレゼンテーション能力およびコミュニケーション能力などのスキルアップを図る。	◎ 大学院進学者の増加に向けた取り組み 入学定員の充足を図るべく、専門基礎能力の涵養に努め、新規研究領域の開拓や研究手法の開発に取り組む。
実行サイクル	4 年サイクル（令和２ 年～ 令和５年）	1 年サイクル（令和４ 年～　　年）	1 年サイクル（令和４年～　　年）
実施 スケジュール	① 現行カリキュラム（講義、実習科目）の問題点・課題抽出．現行の実習科目内容の問題点・課題抽出 ② 学科専門科目の科目、必修・選択の区分、内容、担当者、配当学年・学期などの見直し ③ カリキュラムツリーおよび履修モデルの作成．学外（演習林等）実習科目の実施スケジュールの作成 ④ 履修モデル、および時間割の作成	研究室単位で行う 3 年生の専攻実験実習や 4 年生の卒業論文研究を通して、問題発見およびその問題解決能力、分かりやすく表現できる記述力、プレゼンテーション能力およびコミュニケーション能力などのスキルアップを図る。そのために、各研究室において課題研究発表や、卒業論文の所信表明、中間発表、成果報告会に取り組む。	専攻実験実習や卒業論文指導などを中心として、研究室活動の一層の充実を図る。具体的には、学生参加型のゼミの開催や学習成果の発表機会の確保、学外実習の充実などに取り組む。
目標達成を測定する指標	① 新カリキュラムにおける学科専門科目の確定 ② 新カリキュラムにおける実習科目の内容、スケジュール確定 ③ カリキュラムツリーの作成 ④ 履修モデルの作成 ⑤ 時間割の作成	① 専攻実験実習などにおける情報収集（文献調査など）やプレゼンテーションの評価をおこなう ② 卒業論文の所信、中間、成果発表会や、提出論文などに関する評価を実施する。	①　専攻実験実習などにおける評価をおこなう ②　卒業論文の所信、中間、成果発表会、提出論文に関する評価を実施する。 ③　学外実習機会の確保をはかり、かつ確認する。
自己評価 （☑を記入）	☐　達成した ☑　一部達成した ☐　達成できず要継続 ☐　達成できず目標の変更	☐　達成した ☑　一部達成した ☐　達成できず要継続 ☐　達成できず目標の変更	☐　達成した ☑　一部達成した ☐　達成できず要継続 ☐　達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	コロナ禍の影響は若干残っているものの、目標を達成できた項目も少しずつ増えた。引き続き、平常時の状態に戻しながら、目標達成にむけて努力していきたい。	コロナ禍の影響は若干残っているものの、目標を達成できた項目も少しずつ増えた。引き続き、平常時の状態に戻しながら、目標達成にむけて努力していきたい。	コロナ禍の影響は若干残っているものの、目標を達成できた項目も少しずつ増えた。引き続き、平常時の状態に戻しながら、目標達成にむけて努力していきたい。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 コロナ禍以降、オンライン会議等を重ねてきたが、オンライン会議は合理的な面もあり、継続している。	【長所】 学生とのコミュニケーションをほぼ平常時に戻し、講義及び調査研究の指導を行っている。	【長所】 コロナ禍以前の状況にほぼ戻し、大学院生の発表会等を対面で実施し、学部学生へも参加を呼びかける等の工夫を行った。
	【特色】 とくに無し。	【特色】 本学の実学主義の理念に基づき、森林・林業現場での諸研究の推進につとめている。	【特色】 本学の実学主義の理念に基づき、森林・林業現場での諸研究の推進につとめている。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次年度への課題	【問題点】 ポストコロナにおける新たな方向性を検討する。	【問題点】 ポストコロナにおける新たな方向性を検討する。	【問題点】 ポストコロナにおける新たな方向性を検討する。
	【課題】 新カリキュラムが始まり、その対応をはじめ、各資格申請も変更する。	【課題】 大学運営と教育双方のバランスを図り、充実した教育の推進に努める。	【課題】 大学院教育を充実をさせ、その研究内容の発信にも努める。

根拠資料名			

２．研究に関する総合的事項

	①	②	③
目　標	◎ 学内での連携による研究の推進 学科内、学部内、学内における研究交流の実現。	◎ 学外関係者との連携による研究の推進 学外における研究交流の実現。	
実行サイクル	2 年サイクル（令和 3 年～ 令和 4 年）	2 年サイクル（令和 3 年～ 令和 4 年）	＿＿年サイクル（　　年～　　年）
実施 スケジュール	単独研究あるいは同一専門内における研究に終始せず、学内の他分野との連携強化を図る。また、共同研究の成果を論文などの形式で公表することを念頭に、初年度は研究内容の調整と研究計画の策定を実施する。	学内における研究に終始せず、学外の他分野との連携強化を図る。また、共同研究の成果を論文などの形式により公表することを念頭に、初年度は研究内容の調整と研究計画の策定を実施する。	
目標達成を測定する指標	① 連携実績の確認 ② 研究計画策定の確認 ③ 成果公表（準備）の確認	① 連携実績の確認 ② 研究計画策定の確認 ③ 成果公表（準備）の確認	
自己評価 （☑を記入）	☐　達成した ☐　一部達成した ☑　達成できず要継続 ☐　達成できず目標の変更	☐　達成した ☐　一部達成した ☑　達成できず要継続 ☐　達成できず目標の変更	☐　達成した ☐　一部達成した ☐　達成できず要継続 ☐　達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	コロナ禍の影響により、連携についてはまだ実現できていない。	コロナ禍の影響により、連携についてはまだ実現できていない。	
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 なし。	【長所】 なし。	【長所】 ・
	【特色】 なし。	【特色】 なし。	【特色】 ・
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 連携の未実施については、研究の各分野・領域における研究手法の差異による影響も大きい。調査研究における共通項だけでなく、補完関係による研究形態を検討していきたい。	【問題点】 連携の未実施については、研究の各分野・領域における研究手法の差異による影響も大きい。調査研究における共通項だけでなく、補完関係による研究形態を検討していきたい。	【問題点】 ・
	【課題】 ・	【課題】 ・	【課題】 ・
根拠資料名			

2023（令和 5）年度　包括的な点検・評価報告書

様式２

３．その他に関する総合的事項

	①	②	③
目　標	◎ 学科 PR 活動の強化 受験生の増加、質の高い学生確保に向けた学科広報のあり方を検討し、高校への出張講義や一般市民対象の講座など学内外において積極的な PR 活動を行う。また、学科パンフレットの見直しや学科関連の出版物刊行など PR 活動の充実を図る。	◎ 危機管理体制の改善・強化 学科内に既に設置してある「危機管理委員会」および「将来構想委員会」などの連携を強化し、各種ハラスメントおよび事故などの発生防止に努めるとともに、万が一の事案発生についてシミュレーションを行う。	◎卒業生（同窓会）との連携強化 同窓会組織等と連携し、相互に資する関係の強化を図り、学生の確保、卒業生の就業機会の確保に努める。また、同時に学科の社会貢献の一環として位置づける。
実行サイクル	3 年サイクル（令和２ 年～ 令和４年）	1 年サイクル（令和４年～　　年）	1 年サイクル（令和４年～　　年）
実施 スケジュール	① 指定校を見直し、質の高い学生を確保 ② 高校への出張講義などを増加、学科の PR ③ 全国の高等学校森林・林業教育関係者との連携を図り、大学・学部・学科の PR を行う ④ パンフレットなどの見直しを行う	① 危機管理委員会の開催 ② 将来構想委員会の開催 ③ 危機管理委員会および将来構想委員会の連携	① 学科教員の同窓会活動への参加 ② 同窓生による学科学生のための各種行事（講座など）の開催 ③ 卒業生名簿などの整備
目標達成を測定する指標	① 指定校の見直しを確認 ② 高校への出張講義などの増加状況の確認 ③ 全国の高等学校森林・林業教育関係者との連携実態の確認 ④ パンフレットなどの見直し状況の確認	① 危機管理委員会の開催確認 ② 将来構想委員会の開催確認 ③ 危機管理委員会および将来構想委員会の連携状況の確認 ④ 学生の学内外における活動の規定・ガイドラインやマニュアルなどの整備（改定および新規作成）	① 学科教員の同窓会活動への参加状況の確認 ② 同窓生による学生のための各種行事の開催状況の確認 ③ 卒業生名簿の整備状況の確認
自己評価 （☑を記入）	☐　達成した ☑　一部達成した ☐　達成できず要継続 ☐　達成できず目標の変更	☐　達成した ☑　一部達成した ☐　達成できず要継続 ☐　達成できず目標の変更	☐　達成した ☐　一部達成した ☑　達成できず要継続 ☐　達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	コロナ禍の影響により、新たな工夫等を盛り込むことができず、PR 活動の充実については、今後も継続した努力が必要。	「実施スケジュール」に示される各項目についてはほぼ実現したが、現下の状況に即応しうる体制の整備は不十分。	同窓会活動等の多くが中止となる中で、本目標については殆ど実現していない。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 なし。	【長所】 なし。	【長所】 なし。
	【特色】 なし。	【特色】 なし。	【特色】 なし。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次年度への課題	【問題点】 大学あるいは学部のビジョンとの関連において、学科の特性を再確認し、PR 活動に臨むことが肝要であるが、不十分な達成状況にある。	【問題点】 きめの細かい目配りを行うことが困難な状況にあり、また学科内外の関係者との緊密な連携も困難である。	【問題点】 同窓会・卒業生等との連携を可能とする新たな手法を見いだし得ない。
	【課題】 大学・学部のビジョンを再確認・再認識しつつ、学科の魅力の掘り出しに努め、その成果を PR する。	【課題】 関係者との連携を強化し、ハラスメント等の発生防止に努める。	【課題】 新たな関係の構築方法を模索し、同窓会・卒業生等との連携の強化を図る。
根拠資料名			

2023（令和５）年度　包括的な点検・評価報告書

様式２

学部名　　地域環境科学部
学部長名　大林　宏也
学科名　　生産環境工学科

１．教育に関する総合的事項

	①	③	④
目　標	～ 数学補習 ～ プレイスメントテストによるリメディアル授業履修対象とならなかった１年生や数学を不得手と感じている希望学生へ数学の補習授業を実施することによる学生の成績向上	～ 個人面談 ～ 全学生に対して個人面談を実施することによる履修状況の把握とともに修学に関する障害の解消と、特に成績不振者の学習意欲の向上と学力向上への寄与	～ 授業視察 ～ 教員相互で授業視察を実施することによる教員の授業改善
実行サイクル	1 年サイクル（令和５年）	4 年サイクル（令和５年～8 年）	1 年サイクル（令和５年）
実施 スケジュール	・4 月，プレイスメント試験 → 対象学生の選抜 ・前期，補習授業を実施 ・後期，効果測定	・学年ごとに年 1～2 回の個人面談を実施 ［1 年生］前後期，（面談担当班別） ［2 年生］前期（面談担当班別），後期（分野） ［3 年生］前後期（研究室） ［4 年生］前後期（卒論担当者）で実施	・前期，対象科目の選択 → 授業視察の実施 → 報告書の作成 ・後期，対象科目の選択 → 授業視察の実施 → 報告書の作成 ・次年度の授業への反映
目標達成を測定する指標	・前期必修科目「数学」の成績評価	・学生カルテの作成実績 ・満足度調査での評価	・各授業科目における過去の評価と当該年度での改善箇所の公表
自己評価 （☑を記入）	☐　達成した ☑　一部達成した ☐　達成できず要継続 ☐　達成できず目標の変更	☐　達成した ☑　一部達成した ☐　達成できず要継続 ☐　達成できず目標の変更	☐　達成した ☑　一部達成した ☐　達成できず要継続 ☐　達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	理数系科目の基礎学力の低下が著しいため，平成 30 年度より数学の補講を学習支援として行っている。令和５年度は前期 37 名，後期 30 名を対象として各学期，研究室で分担し少人数クラスとなるようにして実施した。	面談実施割合は、1 年生前期 95%、後期 89%、2 年生前期 82%、後期 60%、3 年生 66%、4 年生 37%であった。	コロナ禍の影響でここ数年授業視察は実施できなかったが、本年度は後学期において抽出した 9 科目について授業視察を実施した。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・基礎学力の向上を図り学力の差を小さくすることで、専門教育への導入を円滑にできる。・少人数できめ細かい教育が可能となる。・数学以外の科目の他、学生生活などについても上級生に相談できるよい機会となっている。	【長所】 ・個々の学生の状況を詳細に把握することで、個別の指導を実現している。 ・学生のコミュニケーション能力の向上を図れる。 ・教育面のみならず、学生のメンタル面のケアも可能となる。	【長所】 ・他の教員の授業の実施状況を知ることにより、自身の授業改善に活用できる。
	【特色】 ・正規の授業ではない補習的な教育を行っている。	【特色】 ・本年度はクラス担任制にとらわれず、より学生と接する機会の多い教員（例えば 3･4 年生であれば所属研究室教員）が面談を担当している。	【特色】 ・職階と無関係に、建設的な評価を行っている。 ・被評価者は評価結果を受け、必要であれば改善に向けて努力してもらうような仕組みにしている。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次年度 への課題	【問題点】 ・希望者に対して実施しており、また、正規授業ではないので強制力が乏しい。 ・上級生の協力が必要で、協力者にはアルバイト代を支給している。	【問題点】 ・面談連絡に反応しない学生もいる。 ・面談は行っているが、記録を残していない者が多いようなので、記録の記入を徹底する。	【問題点】 ・視察結果の次年度への活用、授業改善などを確認する仕組みを構築する必要がある。
	【課題】 ・学生のモチベーションの維持・向上を図る必要がある。	【課題】 ・上級生になるほど実施割合は減少するが，実験の授業や卒論指導などで学生の状況は把握できる機会は少なからずあるので，負担を少なくして記録として残せるようなやり方を検討する。・面談の効果を学生指導に反映させる仕組みを構築する必要がある。	【課題】 ・視察の実効性の評価の検討が必要である。
根拠資料名	数学補習希望者（b1-①-1）	個人面談記録（b1-③-1）	授業視察担当者（b1-④-1）

2023（令和５）年度　包括的な点検・評価報告書

様式２

２．研究に関する総合的事項

	①	②	③	④
目　標	～ 研究成果の公表 ～ 学会等での研究発表数（指導学生発表分を含む）の増加	～ 研究費 ～ 競争的資金への応募数及び獲得数の増加、その他の外部資金の獲得数の増加	～ 他機関との連携 ～ グローバル連携協定校、その他の学外機関等と実施する共同研究の増加	～ その他 ～ 研究の進捗・達成度・満足度の増進
実行サイクル	1 年サイクル（令和５年）	1 年サイクル（令和５年）	1 年サイクル（令和５年）	1 年サイクル（令和５年）
実施 スケジュール	・定期的に開催される学会等への参加あるいは学会発表の実施 ・年度末，効果測定	・9 月，科研費への応募 ・令和５年４月，結果通知 ・その他の外部資金への応募 ・年度末，効果測定	・随時，グローバル連携協定校とのコロキウム実施 ・随時，学外機関との共同研究を実施 ・年度末，効果測定	・4 月，調査を実施 ・年度末，効果測定
目標達成を測定する指標	・学会やシンポジウム等参加者数 ・学会発表者数 ・投稿論文数	・競争的資金応募数と獲得数の実績 ・その他の外部資金応募数と獲得数の実績	・グローバル連携協定の締結数 ・グローバル連携協定校との共同研究数 ・その他の共同研究数	・業務の中で研究に費やす時間割合 ・満足度・充実度
自己評価 (☑を記入)	☐　達成した ☑　一部達成した ☐　達成できず要継続 ☐　達成できず目標の変更	☐　達成した ☑　一部達成した ☐　達成できず要継続 ☐　達成できず目標の変更	☐　達成した ☑　一部達成した ☐　達成できず要継続 ☐　達成できず目標の変更	☐　達成した ☐　一部達成した ☑　達成できず要継続 ☐　達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	研究発表数は口頭発表･ポスター発表数は 18 報であった。また投稿論文は 15 報であった。	科研費等の外部資金は８件獲得することができた。	学部での協定校とのコロキウムの主催回数は２回，共同研究数は２件，その他，学外機関との共同研究数は４件であった。	本年度は、業務の中で研究に費やす時間割合などの調査を実施できなかった。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・他の研究者との議論を行う場に参加することで研究者としての資質の向上、研究へのモチベーションが確保できる。	【長所】 ・当該研究の必要性、意義などを第三者に評価される機会となる。 ・研究費がつくことで研究がやりやすくなる。	【長所】 ・学部グローバル連携の実績となる。 ・海外の研究者との研究交流を図れる。	【長所】 ・教員の研究に対する現状を再認識でき、研究意欲の維持を図れる。
	【特色】 ・本大学から支給される研究費により学会等への会費の助成が受けられる。	【特色】 ・獲得のための説明会などが大学で開催されている。	【特色】 ・学部４学科で協定校の増加を図っている。	【特色】 ・目に見える形として現れにくい研究実績を評価している。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次年度への課題	【問題点】 ・当然のことではあるが、授業や学内諸行事と学会開催日とが重複する場合があり、学内業務を優先させなければならない状況にある。	【問題点】 ・応募する研究を実行に移す時間的余裕がない場合もある。	【問題点】 ・現地の状況が把握できていない場合や日程調整が難しい場合がある。 ・時差のため時間帯の設定が難しい場合もある。	【問題点】 ・根拠を示しにくい。
	【課題】 ・学会等出席のための出張のしやすい環境が必要。 ・研究論文作成に関する時間の確保が必要。	【課題】 ・研究に着手しやすい環境作りが必要。	【課題】 ・参加しやすい環境作りが必要。 ・今後、提携先の大学を訪問し、直接会って議論する場があると良い。	【課題】 ・実績の根拠を示せるような方策が必要。
根拠資料名	各教員からの回答（b2-①）	各教員からの回答（b2-①）	学部国際化推進の活動（b3-③-1～5）	実施しておらず資料なし

2023（令和５）年度　包括的な点検・評価報告書

様式２

３．その他に関する総合的事項

	①	②	③	④	⑤
目　標	～ 学科の組織再編 ～ 次回のカリキュラム改正に合わせた学科改組の実施	～ 入学者確保 ～ 入学者確保のための対策の立案・実行と多様な受験生の獲得	～ 学科広報と学生の研究力向上 ～ 大学祭文化学術展等を利用した学生の研究の公開による研究者意識の醸成とプレゼンテーション能力の向上	～ 就職支援 ～ 学科（課外活動組織）で企画する就職セミナーや業界研究会の開催，公務員試験対策講座の実施による専門性を活かした就職先への就職者数の増加	～ 学生の FD 支援 ～ 学科の課外活動組織を利用した現地見学会の実施による学生の社会貢献のための資質の向上
実行サイクル	1 年サイクル（令和５年）	1 年サイクル（令和５年）	1 年サイクル（令和５年）	1 年サイクル（令和５年）	1 年サイクル（令和５年）
実施 スケジュール	・令和５年４月～ 分野・研究室・教員配置の検討，カリキュラムの確認 ・令和５年４月～2024 年新カリキュラム体制と現カリキュラム体制の運用の検討と実施 ・適宜，学生へ周知する	・4 月，対策を立案する ・随時，実行する ・年度末，効果測定	・4 月～　発表テーマの設定 ・前期，調査研究 ・11 月頃，発表 ・年末，効果測定	・6 月頃，就職セミナーの実施（主に 4 年生対象） ・11 月頃，業界研究会の実施（主に 3 年生対象） ・11 月～翌 2 月，公務員講座の実施 ・年度末，効果測定	・年 1 回程度，現地見学会の実施 ・年度末，効果測定
目標達成を測定する指標	・新体制の公表ならびに在籍学生への現体制運用の説明	・各種受験者数増加のための活動実績 ・受験制度別入学者数の割合	・発表の実績 ・来場者数／参加者数 ・自己評価	・就職セミナーや業界研究会の開催、公務員講座開講の実績　・専門性を活かした就職先への就職率 ・公務員受験者数・合格者数・就職者数の実績	・現地見学会実施の実績 ・参加者の満足度
自己評価 （☑を記入）	☐　達成した ☑　一部達成した ☐　達成できず要継続 ☐　達成できず目標の変更	☐　達成した ☑　一部達成した ☐　達成できず要継続 ☐　達成できず目標の変更	☐　達成した ☑　一部達成した ☐　達成できず要継続 ☐　達成できず目標の変更	☑　達成した ☐　一部達成した ☐　達成できず要継続 ☐　達成できず目標の変更	☐　達成した ☑　一部達成した ☐　達成できず要継続 ☐　達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	学生ポータルなどを利用して 2024 年度新カリキュラム体制と現カリキュラム体制を在学生に周知した。新カリキュラム体制における運用などについて未決定の項目（講義担当者や研究室配置、教員居室など）がある。	高校への出張講義等を実施した。指定校の見直しを行った。また、定期的にプレスリリースを配信し、イベントや学科の PR を行い、入学者確保に努めた。	5 研究室が文化学術展で発表を行った。	就職セミナーや業界研究会を対面形式で実施した。専門科目の公務員対策講座はオンラインで開講した。	現地見学会を 1 月に実施した。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・学科の PR につながる。	【長所】 ・受験者、入学者の獲得は重要な命題である。	【長所】 ・学生のプレゼンテーション能力の増進が期待できる。・学生の研究意欲の増進につながる。・学科の PR になる。	【長所】 ・学生の就職支援を行う。	【長所】 ・現場を知ることで、学習・研究意欲の増進が期待できる。
	【特色】 ・受験生獲得と社会の要望にみあう学科を構築できる。	【特色】 ・学内での受験生向けイベント日程にあわせてプレスリリースを配信した。	【特色】 ・ほとんど研究室で出展している。	【特色】 ・学科の専門色の濃い企画、学生のニーズを反映できる企画を実施できる。	【特色】 ・学科の専門色の濃い見学先を設定している。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次年度への課題	【問題点】 ・何人かの教員といくつかの研究室の意思が反映されない可能性もある。	【問題点】 ・受験生獲得と同時に、社会への人材の輩出という視点も忘れてはいけない。	【問題点】 ・全学生が関与している状況ではない。	【問題点】 ・授業と重複しない日時に企画を設定するのが難しい。・公務員対策講座の参加者が少なかった。	【問題点】 ・授業と重複しない日時に企画を設定するのが難しい。
	【課題】 ・可能な限り全員の希望する形で、新旧体制の運用を実現する。	【課題】 ・社会が必要としている人材ならびにその人材と本学科との関連を丁寧に説明する機会を設ける必要がある。	【課題】 ・より多くの学生が関われるような実施形態を検討する必要がある。	【課題】 ・参加者数の向上と就職支援活動の効果を検証する必要がある。	【課題】 ・夏季休業中などで実施日を調整する。
根拠資料名	特になし	出張講義依頼（b3-②-1） プレスリリース（b3-②-2）	特になし	企業等説明会の開催案内（b3-④-1）	現地見学会案内（b3-⑤-1）

2023（令和 5）年度　包括的な点検・評価報告書

様式２

学部・研究科名　地域環境科学部
学部長・研究科委員長名　　大林　宏也
学科名・専攻名　　造園科学科

１．教育に関する総合的事項

	①	②	③
目　標	都市環境から自然環境に至るまでの育成と保全に科学的かつ実践的に対応できる者を養成することを目標とする。	新たな環境を計画的、デザイン的に創成できる者を養成することを目標とする。	技術と実践力をもって自然環境の利活用を生態技術的、環境芸術的に処理できる者を養成することを目標とする。
実行サイクル	8 年サイクル（平成　29 年～37 年）(2017-2024)	8 年サイクル（平成　29 年～37 年）(2017-2024)	8 年サイクル（平成　29 年～37 年）(2017-2024)
実施 スケジュール	カリキュラムポリシーに基づき、学習目標を学生に周知して授業を実施するとともに、レポート・試験を通して学生の学習目標達成度の評価を行う。 JABEE 認定校としての要件を常に確認し、第三者の審査による教育体制自己点検を含めた技術者教育の確認を継続する。	カリキュラムポリシーに基づき、学習目標を学生に周知して授業を実施するとともに、レポート・試験を通して学生の学習目標達成度の評価を行う。 JABEE 認定校としての要件を常に確認し、第三者の審査による教育体制自己点検を含めた技術者教育の確認を継続する。	カリキュラムポリシーに基づき、学習目標を学生に周知して授業を実施するとともに、レポート・試験を通して学生の学習目標達成度の評価を行う。 JABEE 認定校としての要件を常に確認し、第三者の審査による教育体制自己点検を含めた技術者教育の確認を継続する。 また JABEE 認定のほか、「樹木医補」、「測量士補」、「自然再生士補」の資格認定に対応したプログラムを提供し、学生の学習活性化強化を目指している。
目標達成を測定する 指標	授業シラバス 15 回の定期点検と教員相互の点検を実施する。 また、学生による授業評価と満足度評価を実施する。 日本技術者教育認定機構(JABEE)による教育点検を継続し、点検、評価を実施する。	授業シラバス 15 回の定期点検と教員相互の点検を実施する。また、学生による授業評価と満足度評価を実施する。 日本技術者教育認定機構(JABEE)による教育点検を継続し、点検、評価を実施する。	授業シラバス 15 回の定期点検と教員相互の点検を実施する。 また、学生による授業評価と満足度評価を実施する。 日本技術者教育認定機構(JABEE)による教育点検を継続し、点検、評価を実施する。
自己評価 (☑を記入)	☑達成した ☐　一部達成した ☐　達成できず要継続 ☐　達成できず目標の変更	☑　達成した ☐　一部達成した ☐　達成できず要継続 ☐　達成できず目標の変更	☑　達成した ☐　一部達成した ☐　達成できず要継続 ☐　達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	学生自身が授業科目における目標達成度を十分に理解できるように、成績評価の基準を明示するとともに、答案やレポートの返却を行なっている。学生自身による目標達成度チェックを前期・後期の年２回実施している。	学生自身が授業科目における目標達成度を十分に理解できるように、成績評価の基準を明示するとともに、答案やレポートの返却を行なっている。学生自身による目標達成度チェックを前期・後期の年２回実施している。	学生自身が授業科目における目標達成度を十分に理解できるように、成績評価の基準を明示するとともに、答案やレポートの返却を行なっている。学生自身による目標達成度チェックを前期・後期の年２回実施している。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・第三者機関である日本技術者教育認定機構(JABEE)による教育プログラム認定を得ており、自然科学と社会科学、芸術を包括した造園学の総合的かつ実践的教育を目指すことが可能となる。	【長所】 ・第三者機関である日本技術者教育認定機構(JABEE)による教育プログラム認定を得ており、自然科学と社会科学、芸術を包括した造園学の総合的かつ実践的教育を目指すことが可能となる。	【長所】 ・第三者機関である日本技術者教育認定機構(JABEE)による教育プログラム認定を得ており、自然科学と社会科学、芸術を包括した造園学の総合的かつ実践的教育を目指すことが可能となる。
	【特色】 ・JABEE 運営担当を中心に実施する教育プログラムの改善検討により、目標が適切に実施されているかの点検が継続的に実施されている。	【特色】 ・JABEE 運営担当を中心に実施する教育プログラムの改善検討により、目標が適切に実施されているかの点検が継続的に実施されている。	【特色】 ・JABEE 運営担当を中心に実施する教育プログラムの改善検討により、目標が適切に実施されているかの点検が継続的に実施されている。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次年度への 課題	【問題点】 ・JABEE コース制に伴うコース間における教育目標の差別化及び全体における教育内容の向上の継続	【問題点】 ・JABEE コース制に伴うコース間における教育目標の差別化及び全体における教育内容の向上の継続	【問題点】 ・JABEE コース制に伴うコース間における教育目標の差別化及び全体における教育内容の向上の継続 ・「樹木医補」、「測量士補」、「自然再生士補」の資格認定を受けた学生の卒業後の動向を把握する必要がある。
	【課題】 ・シラバスチェックや学生による学習・教育到達目標達成度チェックで確認された問題点や課題点に対し、対処法的解決に加え、戦略的に改善する方策の検討が必要である。	【課題】 ・シラバスチェックや学生による学習・教育到達目標達成度チェックで確認された問題点や課題点に対し、対処法的解決に加え、戦略的に改善する方策の検討が必要である。	【課題】 ・シラバスチェックや学生による学習・教育到達目標達成度チェックで確認された問題点や課題点に対し、対処法的解決に加え、戦略的に改善する方策の検討が必要である。
根拠資料名	プログラム点検書(実地審査後)(2021 年 10 月 11 日 1 日 JABEE 審査結果) 2023 造園科学科指針	プログラム点検書(実地審査後)(2021 年 10 月 11 日 1 日 JABEE 審査結果) 2023 造園科学科指針	プログラム点検書(実地審査後)(2021 年 10 月 11 日 1 日 JABEE 審査結果) 2023 造園科学科指針

2023（令和 5）年度　包括的な点検・評価報告書

様式２

２．研究に関する総合的事項

	①	②	③
目　標	造園科学の基本である植物、植生、及び自然を科学し、生物技術による環境創成を扱うことを目標とする。	「地域らしさ」について常に思考し、地域環境計画と場のデザインに貢献する造園手法を追求することを目標とする。	造園科学が適用される空間を建設するエンジニアリング分野で、建設技術工学、建設施工管理の理論と実務を扱うことを目標とする。
実行サイクル	＿８＿年サイクル（平成　29 年～37 年）(2017-2024)	＿８＿年サイクル（平成　29 年～37 年）(2017-2024)	＿８＿年サイクル（平成　29 年～37 年）(2017-2024)
実施 スケジュール	日本造園学会、芝草学会、樹木医学会等の活動を行う。 国際学会などの活動を行う。	日本造園学会、都市計画学会、土木学会等の活動を行う。 国際学会などの活動を行う。	日本造園学会、日本庭園学会、日本測量協会等の活動を行う。 国際学会などの活動を行う。
目標達成を測定する指標	学会やシンポジウム等への参加人数、学会誌への投稿数、学会発表者数、学会の運営への参画の実績	学会やシンポジウム等への参加人数、学会誌への投稿数、学会発表者数、学会の運営への参画の実績	学会やシンポジウム等への参加人数、学会誌への投稿数、学会発表者数、学会の運営への参画の実績
自己評価 （☑を記入）	☐　達成した ☑　一部達成した ☐　達成できず要継続 ☐　達成できず目標の変更	☐　達成した ☑　一部達成した ☐　達成できず要継続 ☐　達成できず目標の変更	☐　達成した ☑　一部達成した ☐　達成できず要継続 ☐　達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	国際学会誌のほか、日本造園学会を中心とした関連学会活動や学会発表を行なった。	日本造園学等の主催による地域環境計画へ学生が参加し、教員がその指導にあたっている。 日本造園学会を中心とした関連学会活動や学会発表を行なった。 IFLA Apr Student Design Workshop2023(日本大会)(2023 年 9 月)に参加し、各国の学生達と共同作業を行うとともに、成果発表を行った。	国際学会誌のほか、日本造園学会を中心とした関連学会活動や学会発表を行なった。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・専門分野での研究の充実を図ることができる。	【長所】 ・専門分野での研究の充実を図ることができる。	【長所】 ・専門分野での研究の充実を図ることができる。
	【特色】 ・造園分野における植物分野の研究成果を社会へアピールすることが可能。	【特色】 ・コンペや学会主催の地域環境計画へ参画、造園分野における計画・設計分野の研究成果を社会へアピールすることが可能。	【特色】 ・造園分野におけるエンジニアリング分野の新たな技術開発が可能。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・発表論文数の不足	【問題点】 ・発表論文数の不足	【問題点】 ・発表論文数の不足
	【課題】 ・深化している他分野とのバランスを図る。 ・研究論文作成に関する時間の確保が必要。	【課題】 ・深化している他分野とのバランスを図る。 ・研究論文作成に関する時間の確保が必要。	【課題】 ・深化している他分野とのバランスを図る。 ・研究論文作成に関する時間の確保が必要。
根拠資料名	・日本造園学会誌「ランドスケープ研究 5 号論文」(2023)	・日本造園学会誌「ランドスケープ研究 5 号論文」(2023) ・IFLA Apr Student Design Workshop2023 報告書	・日本造園学会誌「ランドスケープ研究 5 号論文」(2023)

2023（令和 5）年度　包括的な点検・評価報告書

様式２

３．その他に関する総合的事項

	①	②	③
目　標	海外研究機関や組織等との学術交流によるグローバル教育の推進 学部や学科の組織と海外の大学あるいは研究組織との学術連携により交流を図る。	産・官・学の連携による実学教育の推進	地域連携による実践的な教育研究と社会貢献の推進
実行サイクル	＿８＿年サイクル（平成　29 年～37 年）(2017-2024)	＿８＿年サイクル（平成　29 年～37 年）(2017-2024)	＿８＿年サイクル（平成　29 年～37 年）(2017-2024)
実施 スケジュール	海外の研究者、技術者による特別講義開催、学部協定連携校などとの共同プロジェクト研究や国際ワークショップなどの実施によりグローバル社会への適応能力の向上を図る。	産・官・学の連携により、実質的な演習・実習授業及びフィールドワークを通しての実務能力の向上を図る。	地域との連携により、実践的な研究プロジェクト等の実施による実務能力及びコミュニケーション能力の向上とともに、社会的意義の高揚を図る。
目標達成を測定する指標	学術交流に係る特別講義及び授業、共同プロジェクト、国際ワークショップなどの実施。それらの継続的交流のためのプログラムの作成。	演習等における課題の成果発表・講評を実施する。 学科業界研究会を実施し、実学教育の深化を図る。	各地域や造園業界で実践的に活躍する方々を招聘した講演会や特別プログラムの実施状況。
自己評価 (☑を記入)	☑　達成した □　一部達成した □　達成できず要継続 □　達成できず目標の変更	□達成した ☑　一部達成した □　達成できず要継続 □　達成できず目標の変更	□　達成した ☑　一部達成した □　達成できず要継続 □　達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	IFLA Apr Student Design Workshop2023(日本大会)(2023 年 8 月)に参加し、各国の学生達と共同作業を行うとともに、成果発表を行った。9月に来日した学部協定校であるドイツ＿オスナブリュック応用科学大学の学生達とワークショップを実施した。	造園関連産業の第一線で活躍する非常勤講師を演習に招聘した。 演習講評会などに造園関連産業で活躍する方達を招聘した。	学生・地域住民を対象としたイベントやオープンカレッジ(農大サポート)を実施し、東京農業大学の特徴や学科の特性などを伝えた。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・英語による学術的会話の機会取得	【長所】 ・学科独自の教育・特別プログラムの提供	【長所】 ・本学卒業生や関連組織との連携が可能。 ・地域連携が可能
	【特色】 ・専門科目に関する英単語や思考の修得	【特色】 ・アクティブ・ラーニングとの連動 ・学生による社会に対する造園学のアピール ・造園伝統技術の継承	【特色】 ・地域連携や実践者による教育・研究の提示と社会貢献の推進。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・受入側の英語力の向上	【問題点】 ・特になし	【問題点】 ・休日開催の設定が多く、平日開催の可能性を探る必要がある。
	【課題】 ・持続性 ・運営資金の確保	【課題】 ・特になし	【課題】 ・連携内容や社会貢献に対するアピール活動の強化
根拠資料名	・ドイツ＿オスナブリュック応用科学大学ワークショップ参加報告書(2023) ・IFLA Apr Student Design Workshop2023 報告書	学科教員会資料	

2023（令和 5）年度　包括的な点検・評価報告書

様式２

学部・研究科名　地域環境科学部
学部長・研究科委員長名　大林 宏也
学科名・専攻名　地域創成科学科

１．教育に関する総合的事項

	①
目　標	学科目的である「水資源や食料生産、環境保全等の役割を担ってきた農山村地域の保全・再生、持続的発展など、地域の創成に貢献できる人材を輩出する」ため、ディプロマポリシーに基づく教育を実践する。
実行サイクル	4 年サイクル（令和　4 年～　7　年）
実施 スケジュール	(1) 講義・実習・演習を通じて、源流域から中山間地域を経て平野部に至る「農域」の現状と課題に関する学びを深めさせる。(1～2 年次) (2) 地域との協働を通じて農域の持続的発展に必要な技術と経験を身につけさせる。(2～3 年次) (3) 出口である就職先を意識させるとともに、各研究室において専門的な教育・研究を実施する。(1～4 年次)
目標達成を測定する 指標	(1) フレッシュマンセミナーの実施記録 (2) 地域交流実習、フィールド実習(一)(二)の成果 (3) 総合実習(一)(二)の成果 (4) 卒業論文の成果
自己評価 (☑を記入)	☐　達成した ☑　一部達成した ☐　達成できず要継続 ☐　達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	本年度は地域創成科学科の設立 7 年目にあたる。先述した教育に関する総合的事項の目標と実施スケジュールに基づき、2 年次の総合実習(一)および総合実習(二)において、キャンパスある世田谷区を中心とした実施計画を策定し、都市農地を有する既成市街地の現状と課題に関する学びを深めさせた。出口である就職については、3 年次からキャリアの意識付けを行ってきた。研究活動では、専攻実験実習(一)（二）や研究室活動を通じて専門的な教育・研究を行った。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 教員の専門分野が多岐に及ぶこと、様々な地域との連携活動・実績があることから、地域創成科学科ならではの教育が可能となっている。
	【特色】 現地での作業･交流･調査に加えて、演習室での議論･取りまとめ･プレゼンテーションを実施することで、実践的かつ能動的な教育を行っている。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次年度へ の課題	【問題点】 特になし
	【課題】 特になし
根拠資料名	・学科ホームページ、学科インスタグラム ・2023 フレッシュマンセミナースケジュール

2023（令和 5）年度　包括的な点検・評価報告書

様式２

２．研究に関する総合的事項

	①
目　標	競争的研究資金等の積極的な導入により地域創成に関わる実学研究を推進させる。また、学会発表や学術論文、シンポジウム等を通じて、最新の研究成果を学外に積極的に発信する。
実行サイクル	1 年サイクル（令和　4　年～　5　年）
実施 スケジュール	(1) 研究資金獲得：原則として教員全員が競争的研究資金に申請 (2) 研究成果発表：国内外の学会大会や学術雑誌等で研究成果公表 (3) 活動成果発信：学科 Web 等で活動成果を発信する
目標達成を測定する指標	(1) 研究資金の申請・獲得状況 (2) 研究成果の公表状況 (3) 学科 Web 等での研究成果発信状況
自己評価 （☑を記入）	☐　達成した ☑　一部達成した ☐　達成できず要継続 ☐　達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	学科内の教員を含め研究代表者または研究分担者として競争的研究資金への申請を行っている。各教員がそれぞれの専門分野において活動し、成果を公表している。個別具体的な研究の取り組みとそれらの成果については、自己点検評価の一環として大学の公式 HP に掲載されており、そちらを参照して頂きたい。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 各教員の専門分野が多岐にわたる。
	【特色】 それぞれの専門分野を活かした研究を実施するとともに、分野横断的な活動を行っている。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次年度への課題	【問題点】 特になし
	【課題】 特になし
根拠資料名	学科ホームページ、学科インスタグラム

2023（令和 5）年度　包括的な点検・評価報告書

様式２

３．その他に関する総合的事項

	①	②	③
目　標	様々な地域を対象とした「地域づくり」プログラムの実施		
実行サイクル	___1___年サイクル（令和　　4　年～　5　年）	_____年サイクル（　　年～　　年）	_____年サイクル（　　年～　　年）
実施 スケジュール	(1) 学科教員が個人的に実施する地域連携プログラムを推奨・支援する。 (2) 学科として組織的に実施する地域連携プログラムへの参加を促し、学生への教育にフィードバックする。		
目標達成を測定する指標	(1) 地方自治体等と共同研究を推進するための補助金等の獲得状況 (2) オープンキャンパス等における活動成果の公表状況		
自己評価 （☑を記入）	□　達成した ☑　一部達成した □　達成できず要継続 □　達成できず目標の変更	□　達成した □　一部達成した □　達成できず要継続 □　達成できず目標の変更	□　達成した □　一部達成した □　達成できず要継続 □　達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	地域連携に関する学科教員の活動エリアは、群馬県川場村、熊本県阿蘇地域、長野県小谷地域、佐賀県みやき町、福島県鮫川村、岩手県･宮城県沿岸地域など、多岐にわたっている。学生に対してはポータルや講義･演習を通じて、これらの活動への参加を呼びかけている。活動成果の一部は、学科 HP やインスタ、オープンキャンパス等で一般に向けて公表している。		
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 学科及び各教員の地域連携プログラムを積極的に支援することで、研究･教育活動を活性化させている。	【長所】 ・	【長所】 ・
	【特色】 地域創成科学科の設立目的である「地域づくり」に向けて、実践的な活動を行っている。	【特色】 ・	【特色】 ・
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・特になし	【問題点】 ・	【問題点】 ・
	【課題】 ・特になし	【課題】 ・	【課題】 ・
根拠資料名	学科ホームページ、インスタグラム		